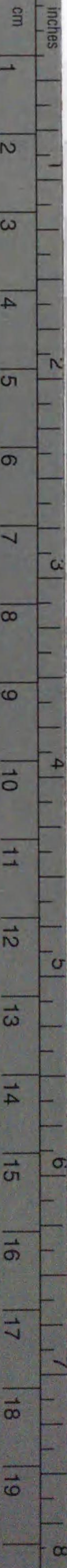


Kodak Gray Scale



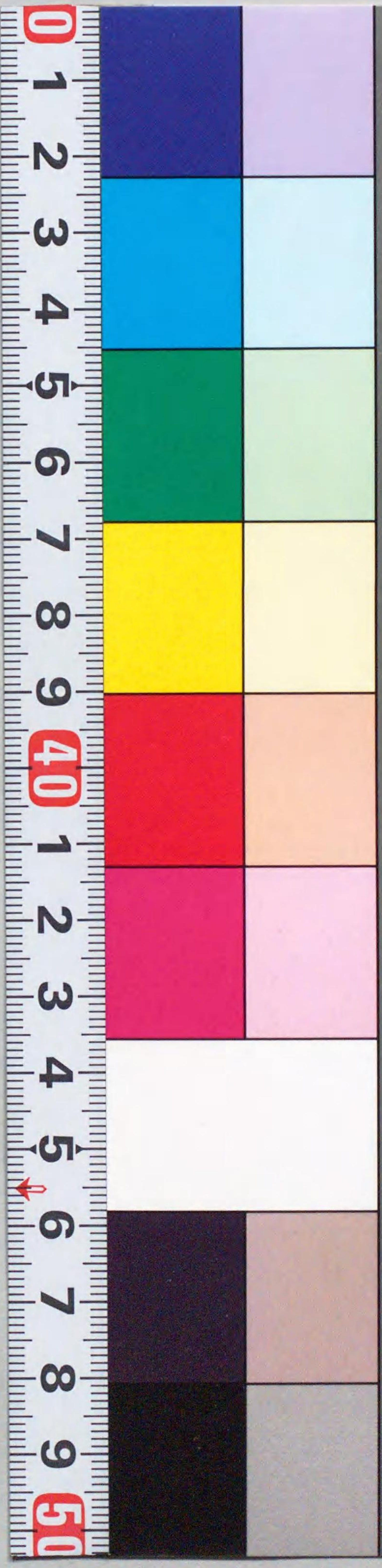
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



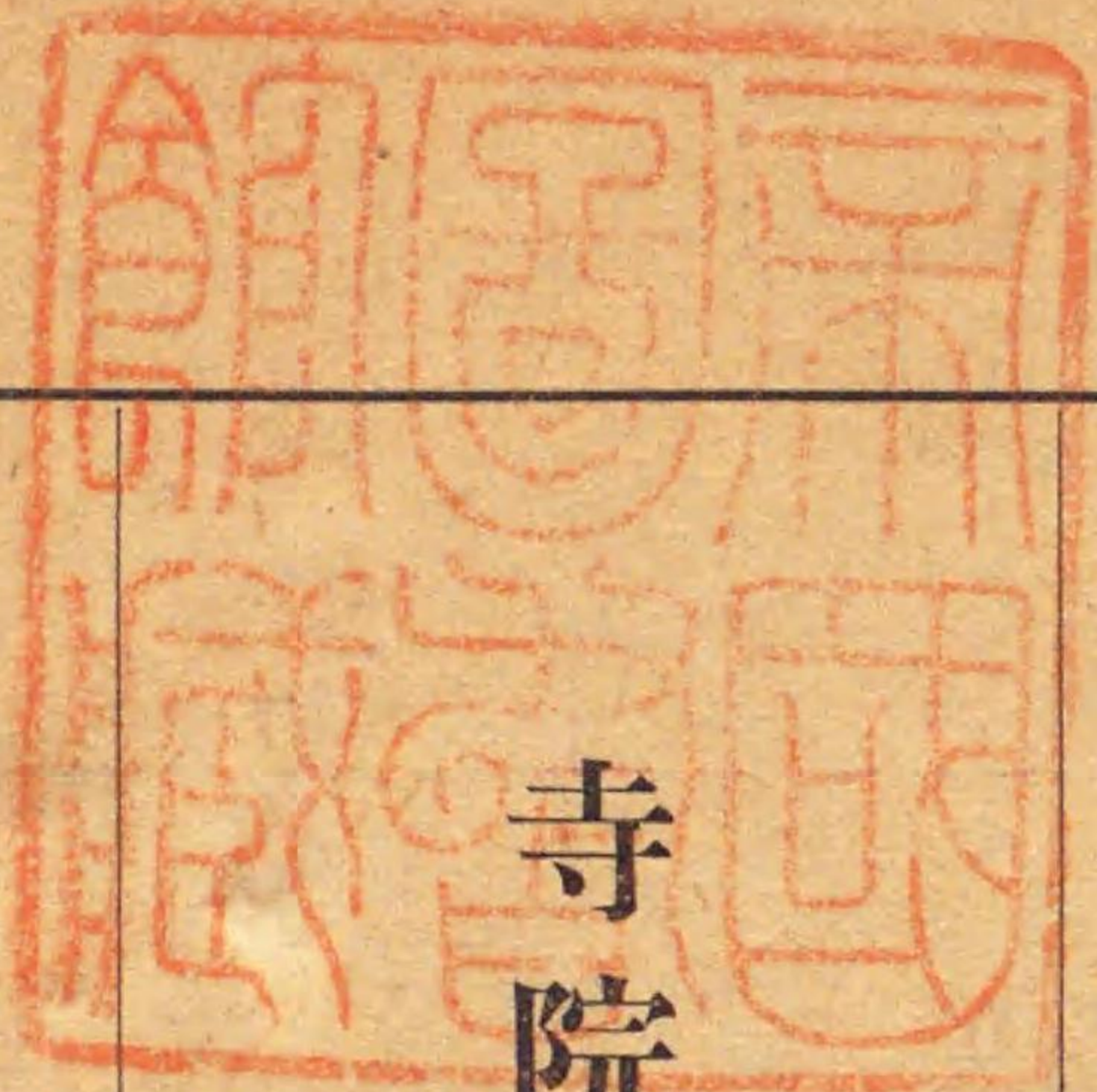
Y994

J7977

寺院厚生事業の要訣

安藤専哲述

教化資料叢書 6



東京府
事務官
安藤專哲述

寺院厚生事業の要訣

教化資料叢書
6





I 種
W



1200801319518

Y994
J7977

- 一、一派の教線に活動して居る人々の爲に、或は修養の資となるもの、或は教化の参考となるもの、或は布教の資料となるもの等を、順次に出版する。
- 一 各方面の大家にお願し、又は特殊の研究者にお願して、特定の題目について執筆を願ひ、或は講演、談話等を速記し筆記したるものを内容とする。
- 一、冊子は簡素を旨とし通讀に便なるを期して、體裁を一定し、教化資料叢書と名づけ、種類を分たず出版の順に従つて番號を附する。

教 化 研 究 院

寺院厚生事業の要訣

東京府事務官 安 藤 專 哲 述

寺院に生れ宗門の學校に學び、宗門人として格別の愛惜を有つてゐる私が、今回特に催されました時局婦人厚生講習會に於て、寺族婦人並に寺院とは特別密接なる關係にある、婦人の方々と親しく御目にかゝり、卑見の一端を申述べる機會の恵まれましたことを大層ありがたく存じます。

寺院に於て實施すべき厚生事業と謂つても、それは多種多様であつて一概し兼ねる處ではありませんが、先づ現代の社會は、厚生施設として寺院に何を期待するかといふことを申述べるならば、この課題に逼適しうるのはないかと考へられます。特に最近われらの學友で、現に寺院に於て各方面に盡瘁してゐられる人々から、宗團法も施行されて、寺院で何等かの社會的活動を要望されてはゐるが、さて我々として如何なる施設を實施すればよいのだろうか。厚生施設には素人である自分達には、全然その目安がつかなくて困るといつた様なことを述べ、我々の意見を徴せられる向もあるので、かうした質疑にも應へる意味に於て、この機會に私見の一二を申述べて見様と思ひます。どうか本講習會を一エポックとして、以下申述べるところを参照されまして、適當に取捨選擇せられ、夫々の郷土に即應し適切なりと考へらるゝ處を寺院で實現せられ、また檀信徒の方々も、これが實

現に御協力を御願ひ致し度いと存じます。

一、基本調査

事業の実施に先立つて、一番大切なことはその基本となるべき調査が必要なのであります。かう申せば、又調査か、それが厭なのだと言はるゝでありませうが、露骨に言へば、これが僧侶の長所でもあるが、亦、通有した短所でもあるのです。とかく面倒な手續は僧侶の方々の極度に嫌はるる所でありますが、かうした點は、特に科學的な進み方を要望するゝ今日の時代に於ては、強ひてうち堪えて貰はなければならぬ要件なのであります。基本調査なくして事業の実施にあたることは、診断を抜きにして投薬する様なもので、大變な冒険でありまた無暴なことだと言はなければなりません。厚生事業の上にて、極力避くべきことは翻譯や模倣であつて、その土地の事情などを考へずして、何等かの事業實施に當る場合、勢ひそれは翻譯か模倣に陥らざるを得ないのであります。ほかで斯ういふ事やつてゐるからとか、他所であつた事業をはじめ大層うまくやつてゐるからといふ風に、他のものをそのまゝ移して、自分の土地の特殊事情をも調べないで、これを實行するのは、誠に危険千萬の事と謂はねばなりません。かうした結果は、託兒所を經營しやうとして萬般の準備は進めたが、さていよいよ開所せんとしたところ、肝腎のお客様たる子供がやつて來ない。驚き且つ怪しんで調べて見た處が、託すべき子供が案外少數で、折角の託兒所も臺なしだつたといふ様な笑へない事例が、私の實驗した處にあつたのですが、全く鵜の眞似する烏の水に溺れる様な話で、これといふも調査を輕視する結果といふより外、誰を恨むべき途も

ない譯であります。嘗て私は子供の宗教教育といつた立場から、逸早く日曜學校の必要性を強調したものでしたが、これが流行り出すと、珍らしいものに好奇心が動いて、何等の用意もなくして、これを始めた向も全然なかつたとは言へませぬ。ある寺では、これが開始を村内に宣傳して、いとも華やかに第一回を催する。かかる場合御住職は、子供の人氣を一身にあつめる必要上、所謂十八番といふ得意の童話を、面白おかしくやつてつけて、これが宗教教育上如何なる効果をあげるかどうか、兒童の宗教心理などといふ様な深いことまでは考慮することなく、子供からの單なる拍手喝采で、大成功顔して心潜かに得意の鼻をうごめかすが、さて第二回目となると、既に得意の十八番は品切だから、其日は第二流の童話で済みます。子供は前回程には喝采してくれない。三回四回次第に低調になつて來る。子供の喜び様も漸落してゆくが、その集りも漸減してゆく。驚いた住職は、これではならぬと周章して、次には鉛筆をやり、ノートをやり、さてはお菓子の景品で子供を吊るといつた具合になつて、こゝに經濟上の行詰りから二ヶ月位の短命で終りを告げるといつた悲喜劇は、不用意、無定見から來る結果だと斷ぜざるを得ないのであります。われらが所期する寺院の厚生事業は、かかる譏を受けぬ様に、その實施すべき地域の事情を巨細に究明し、何をなすべきかの前に、何を要望するかを探り、次でその事業實施の財源、方法はもちろん、その陥ることあるべき得失等に至るまで、充分の研究調査を遂ぐる事が先決の豫件たることを忘れてはならないのであります。

別に寺院に於て實施すべき厚生施設といつて、確固不動の定則があり、彼此勘考の動かぬ據があるものでないことは判り切つたことでありまして、その郷土の實態を精細に見究めるとき、其處に何が要求されるか、寺院と

して、その何れの方面に積極的に乗り出すべきかを考へる處に、自らその種別と方法とは産み出さるべきものなのであります。しかし、斯く申せばとて、厚生施設に従事するに就ては、それに相當せる科學的な研究や諸要素が要らないといふのではありませぬが、それらに就ては追つて申述べて見たいと存じますから、こゝには詳説することを省きます。

二、時局と寺院

大東亞戰下に於ける現時の時局は、平時に於ける一年を一月に短縮し、十年の歳月を一年に縮めたと謂つても差支のないほど、否それよりも猶大きな時代のへだたりを、一足飛びに經過したといふほど一大變革を齎らして居ります。平時に於て何十年かゝる様な大變革をも、極めて短時日の間に實現せしめて居りますことは既に熟知せらるゝ處であります。かうした時代に於きましては、あらゆるものに對しての社會的な批判のメスも極めて深刻に加へられて參りますが、なほ寺院に對する世の批判も此の例に洩れず、最近宗門内外の狀勢は寔に多事多端を思はせるものが多いのであります。かゝる時局に際しては、特にその動靜の上に格段の留意を要することが大切だと思ひます。現代の寺院は何をしてゐるか、僧侶は何をしてゐるか、といふ様な聲も屢々耳にするところでもあります。かゝる苛酷な世評をそのまゝ當然のこととして受け入れるものではありませんけれども、これらの有聲無聲の世論に聞くといふことも、忽にしてはならないところだと考へられます。

僧侶に對して葬式専門だとか、お經の配達だとかの惡聲を放つものがありますが、これらは事情を知らぬ者のいふ處で、これらの事柄にしても、それ自らもつ極めて有意義なことを見逃してはならず、われらはかゝる様の下の力持然たる仕事に對しても深き敬意を拂ふもので、その不斷の御勞苦はもとより、これが社會的に及ぼす大きな力を深く認むるものであります。然しこれと共に世論の動向に常に深い關心を怠つてはならないと思ひます。特にわが淨土眞宗の僧俗にとつては、一層の深い反省が大切ではないかと思はれることがあります。それは宗祖聖人の古からもつわが宗門獨特の宗風で、蓄妻毆肉の在家同事の行狀を特徴とする以上、その俗諦相に於ても、皇民生活の龜鑑たるに恥ぢない覺悟と用意とを示さなくてはならないと思ひます。その實生活に於ても世の指彈をうけたり、世評の的となつたりする様なことがあつては、大法宣布の上に於てまでその累を及ぼすものであることを怖れなければならぬと存じます。最近の隣組精神の發展等に省みても特に深い省慮を要望したいと存じます。

私共は終始黙々として世の捨石となり、血の滲む様な蔭の御努力を敢てしてゐられる立派な宗門の諸先輩同友を、社會事業の上に發見して居りますが、飽迄も謙仰苦闘爲法不爲身の大業に御精進あらんことを切望致します。わが國社會事業の發達は殆んどわが佛教僧侶にその先蹤を見るのでありまして、寔に立派な人々を輩出して居りますが、例へば菩薩春朝の如き、牢獄に繋がる、囚人を救はんが爲に、一代に七度も自ら牢獄に投ぜられて教化を施したと傳へられて居り、また梅尾の明惠上人の如き、癩を病める患者に自身を與へてその苦惱を拯はんとせられたことも傳記に見えて居りますが、孰れも佛心者大慈悲是の具現に外ならぬことを思ひ、自ら頭のさがるのを禁じ得ない物語であります。私共宗門人は、これら高僧が身を以て具現された佛心を現代に生かす爲に、

世の衰賤に超然として、不惜身命の努力を續けたいものと念願致します。

今や時局は犇々と我々の身邊に迫り來り、その非常時の様相を身近に感じまして、佛具も梵鐘も召されて國家に獻納し、重大な覺悟を要望して居ります。廣濶なる寺門の住居や、眞宗寺院の夫婦共棲の生活などにも、鋭い社會的批判が加へられる時が來る事と思はれます。私共は決してこれを怖るゝものではありませぬが、それにはそれだけの準備と用意とが必要だと思ひます。われらは斷じて恥するなき信念を把持して、大法の宣布に終始することを勗めたいものと存じます。

三、佛教教義の社會性

佛教の寺院が、何等かの厚生事業施設を實施することは、現時の世相に阿附して爲すものでもなければ、基督教などと對立する必要から、斯る事柄を事新しく主張するのでもないので、佛心者大慈悲是の教義を現代社會に擴充せんとするものに外ならないのであります。佛の救済も、われらの住める世間を介して行はれるものであつて、この世を透してこそ、其處に救済も度生も行はれてゐるものであることを忘れてはならないと思ひます。従つて、われらの現實の生活に無關係な超然たる宗教の存在は、無意義なものとなるのであります。この苦惱の世を離れて、佛教の教義は説かれたものではないので、煩惱を離れて悟があるのではなく、煩惱そのものが佛の種となるので、あの美しい蓮華は、清らかな高原や陸地には生えないで、却つて汚ない泥中にこそ生ずるものであるやうに、山のやうに大きな我欲を起すものであつてこそ、初めて道を求める心にもなり、遂に悟をも開くに至るのであらう。まことに世に超然たる宗教の存在は、われらには到底理解し得ぬ處であるのであります。従つて現實の苦惱に對して無關心であり、又た無力なる宗教が、大悲救済の實を擧ぐることは企て及ばないことだと言つて差支ないのであります。

特にわが國佛教が流傳して以來、皇國佛教の眞義を發揮して、興禪護國といひ、立正安國と呼び、皇法爲本と談じ、鎮護國家と稱へて、日本佛教たるの本領を發露して、わが國民の血となり肉となつてまいりよくその役割を果して來たことは、千有餘年の佛教史が明らかに實證してゐるところであります。

その、釋尊に依て印度に起るや、四姓差別の階級組織を宗教上より遺憾なく破碎し去つてながくその跡を絶ち、その教團には公共の財産制たる十方僧物の公明なる新組織を設けて、嚴に私欲我利の不合理なる私有財を禁じたるが如き、現時の世相に照して見るとき澆季の今を洞察すること如何に明敏なるかに一驚を喫するばかりであります。西域に、支那に、將た朝鮮に、我國に行くとして可ならざるなく、到る處絢爛たる文化の花を開き、及ぶところ慶福を齎らざるはない。寔に不滅永劫の花を開かして居るのであります。その説かるゝ處は、私欲我利の偏狹偏頗に出づるものではなく、その解脱は普勸同行、願共諸衆生の大理想であり、修行たるや一個の私事ではなく、普皆廻向の公道に外ならない。欲生の淨土たるや、獨善一己の法悅境ではなくして、諸上善人俱會一處の淨刹である。斯かる雄大洞徹の社會宗教が、他に執れに求め得るでありませう。

この世界無比の社會宗教の眞價を發揚すべき光榮ある任務を、われらは須臾の間も忘れてはならないのであつ

て、如何にこれを現代に活かし、如何にこれを世に具現するかについて、遺算なからんことを期する使命を考へなくてはならないのであります。

四、寺院の社會的使命

寺院の社會的使命を自覺して、眞に佛教の社會性を現代に發揮し活かしてゆくことには、先づ寺族の方々が奮起していたゞなくてはならないことは勿論であるが、その周囲の檀信徒の有力な人々が、これに力を與へて貰はなければ達成することは困難であります。去年疊替をした本堂へ、あの様な腕白小僧を集められては困るか、あの様な悪戯盛りの子供をお寺に近けたのでは、境内が荒されて困るといつた様なお叱言が、檀徒の有力方面から出る様だと、折角の寺族の方々の奮起も、その勇氣が鈍るばかりか、遂には沙汰やみの結果を見るに至るのであります。佛像を薪の替りにして、凍えんとする人に暖をとらせられた禪僧の逸話や、一切經翻刻の勸財を、吝む處なく飢者に施されたる高僧の物語なども思ひ合はされまして、現に生活の第一線に健闘してゐる世人の爲に、生きた活佛教としての作用を現はしていたゞきたいものであります。教會や佛堂の中に局り、墓地や焼場にのみ宗教が求められた時代は、遙かに遠く過去の夢と化したことを忘れてはならないのであります。現代は佛の教が、人馬の織るが如く往來する十字街頭や、取引で血眼になつてゐる活社會の裡に、深く味到せられる

のでなければならぬ時代になつてゐるのであります。これらの事情は、進んで寺院の爲に常に御協力を致さるゝ外護者の方々に、充分に御理解を希ひたい處であります。

寺院こそわが郷土の文化的中心であるとの自覺をもつて、力強く働きかけて貰はなくてはならないと思ひます。信仰の中心であることは申すまでもないことですが、あらゆる方面に於て中心施設たるの使命を自覺して欲しいものと思ひます。而して、眞に郷土のソシアルセンターとして、名と實の兼ね備はつたものたらしめる努力が拂はれなければならないと存じます。そしてその内容を如何にするかの問題は、極めて重要な事柄であつて、こゝにこれを詳細に述べる時間の餘裕をもちませぬが、寺院こそこの使命に極めて逼適したものであることは、一點の疑のない處であります。町村政治の中心である役場もこれには應はしいとは言ひ難く、學校またこの要求に適合するものではありません。父祖以來永く魂の培はれ來つたところの、最も親しみに充ちた寺院が、この條件に合致する最も適當したものであることに、誰しも異存はないと存じます。其處にはセトラとして、またチユーターとして、極めて敝り役の寺院住職が棲んで居られる。加之これに配するに坊守があり、その日常生活は一般世俗の生活に何等の異りもない。時には醒い焼肴の臭もすれば、襦袢の旗も風に靡く。しかもその子女は村の村童と机をならべて學校にも通學する。極めて親し味ふかい關係にあるのであります。剩へその所在地が、天台や眞言などに往々見るやうな、山林深く離れた幽邃の地に隔絶せず、聚落簇居の喧雜の人家に入雜つてゐる眞宗の寺院では、特に世俗と近接してゐる事情などから、センターとしての意義は特に深い關係に置かれてゐると考へられます。

眞宗寺院としては、かうした他に見られない厚生事業施設を実施するのに、極めて恵まれた環境に置かれてゐるのでありますから、特にその責任も重く、その意義も重大なものがあるのであります。私はこれらの事情から考へても、寺院が最近の全国的風潮である隣組常會などの指導上にも、極めて強い活動分野が開かれてゐるのではないかといふことを思ふものであります。常會などの起原についても、一般には二宮尊徳翁あたりから發した様に説かれては居りますが、その淵源は猶々古く、考へ方によつては中興上人の毎月兩度の寄合云云のことも信徒常會として解釋すべきものではなからうかとも思ひ、「講」の由來なども見逃してはならない様にも思ふてゐるものであります。こゝでは餘談に涉りますから省略させていただきます。ともあれ隣組常會の指導などにも、進んで寺院佛堂を供用して、集會の前後、敬虔なる佛前の崇敬禮拜を行ふなど、是非好ましい處であると思ひます。かくてこそ、ともすれば失はれ勝ちなる近時の世相に潤を與へ、和味を生じて床しいものとなると思ひます。聊か餘談に及びましたが、かうしたことにも寺族の方々が進んで供用されない結果は、新に集會場や、公會堂の建築となつて、其處に何等の温か味のない、冷たい感じのする、換言すれば眞のセンターとはなり得ない、一風異つた怪し氣なものが顔を出して、農村あたりの素朴さを蝕む結果を生じて來るのであります。

人手の不足を補ひ、能率の増進をはかる必要があれば、託兒所もよからうし、いくらかの日錢を與へて、生活の足しにすることが大事であると思へば、簡易な投産事業をやるのもよろしからう。土地の狀勢によつては、小資本が要るといふのならば、小資融通の方立てをしてやるのも必要だらう。教育文化の程度が未だしと思はれるならば、簡易文庫も面白いし、巡回文庫を始めるもよからう。學童の成績がおもはしくないといふ風があれば、學校と相談して復習會を始めるのもよからう。かうした事柄には別に型があるわけでもなければ、一定不變の通則といふものがあるのではないのでありますから、その郷土の實情から推して、これらの必要な事がらを、實行可能の程度に、寺を中心として組立て、行けば、其處に立派な、センターとしての寺院の隣保組織が出來上るわけなのであります。そしてその施設相互の間に、連關があり、系統があつて、有機的な作用が加へられてゆけば、立派な寺院中心の隣保事業が出來上つてゆくのだと思ひます。

五、既存觀念の脱却

今日の一年は、平時の二十年にも三十年にも匹敵する様な、大變革大展開を示して居りますことは前にもこれを述べたとほりであります。かゝる時期には、凡てがさうではあります。特に時代に先覺する指導的立場にあるものは、深い考慮を要するものがあると思ひます。寺院に於ては、殊にこれらの動向に細心の留意を要しますが、その根本として先づ心の持ち方を轉換せねばならないではありませんまいか。寺院は從來から——今後も變りはありませんが——法施に對して財施を仰いで立つて居ります。従つて誠に止むを得ないことではありますけれども、よく御取持をする人々を中心に考へてゐる傾向があります。しかし時代の動きはかゝる考方に、再考を促さねばならないのではないかと思ひます。寺檀の關係といふものを基本的な動かぬものとして考へることは變りはないのですが、もつと深く相互に責任を感じて、永遠の結合を念とせねばならない様に思へるのであります。端的に言へば、從來の寺院が、お取持階級の人中心に考へて來た考方を替へて、汎く檀信徒全體の上

眼を注いで、もそつと下の階層の人々に中心を置き替へることが大切であると思ひます。これは寺院の經營上から言つて、無理な注文であるかも知れませぬが、寺檀の關係は永遠でありまた永遠でなければなりません。檀信徒の生活變化の上に長い眼で見えてゆく様に、見る眼を替へねばならぬと思ふのであります。現に落魄して生活に困窮してゐる檀信徒の上に、特に深い慈愛の眼を注いでゆく様にありたい。「左様のことが出来るものか」と、嚙んで吐き出す様に言はれる方もあらうと思ひますが、佛日は普照のものであります。お取持階層の人に對すると同様の慈眼を、落魄の人々へも投げ與へて欲しいといふのであります。横の眼で眺めてゐた眺め方を、縦の眼で見られる様にしたいといふのでありまして、果してこれが無理なまた出来ない御相談でせうか。

宗團法の實施で、寺院には檀信徒の名簿を作製し備付けることになりましたが、これに基いて、私は檀信徒に對しての稍詳細な調査を整へたいと思ふのであります。換言すれば、寺院には檀信徒の登録を、自發的に實施する様にありたいので、かの過去帳は寺院に於ては大切に保存され、檀家に於ても自家で判らぬ古いことは、檀那寺で過去帳を調べて貰へば判るといふ風に、信用されてゐるほどであります。おそらくこれは何處へ行つても同様、極めて行届いたものであると信じますが、これは亡くなつた人々の記録であつて、男女大小残らず記録されてゐる重寶なものではありませんが、その家庭に屬する生きた現存人の調査登録に至つては、完全なものとはなつてゐないのが普通であります。戸主の妻は何處から、何某の何女が嫁いで來たか、その長女は何處へ嫁いだか、息の嫁は何處から、次男は何處へなどといふに至つては、皆目判らぬといふ様で、その生活の業態も、家計の様子なども、これを知る由がないのが一般である。私はこれらを整理して軍事援護も、生活の扶助も、釋放者の保

護も、思想犯の觀察も、檀那寺の住職は、苟くも自分の檀家の事とあれば、これらの事柄については町村役場の當局よりも、方面委員よりも、司法保護の當局者よりも、詳細に知り盡してゐるといふ様にありたいものと思ふのであります。かくてこそ、寺院の住職は自らの檀家の教化も指導もが完全に行ひ得るのであり、その精神の救済と併せて、その實生活への指導にも有力に参加し乗出しうるのであると思ふのであります。かくてこそ自己の檀家から異端者や、異教徒の出現をも未然に防ぎうるのであつて、こゝまで行き届いた關係を有つのでなければ、兩者の關係が永遠に結ばれたとは言ひ難いと思ひます。如何に一家の興廢弛張があつても、常にその動靜を見守り、指導して、力となつてくれる寺院に對する親し味も、一層深いといふ感じは、永遠に兩者を堅く結んで不離の關係に置くのであつて、こゝに寺檀の特殊關係が生じてゆくのであります。

宗團法の實施された現在、私はこれら檀家の登録に伴ふ新しい理念を、わが宗門の上に築き上げたいと願ひて止まないものであります。これがそのまゝ寺院の厚生事業施設の上に大きな寄與をなすものであることを御注意願ひたい。かく言へば、それは五十戸百戸の檀家をもつ小寺のことである。五百戸千戸の御大坊ではそんなことをしてゐる餘裕も暇もない。汝の言ふのは小坊の話で、一般には通じない事柄だとの御叱りがあるであらうと思ひます。私とても、一年経つてもお寺の御院住様のお顔が拜めぬとか、まだ若様のお顔も知らないとか言つた様な御大坊のあることは存じて居ります。しかしお手次の寺とは、かゝる空名を擁して俺の檀家は千戸ある二千戸あるといふ様に、その繩張りの大を誇つてゐるだけの、資本主義的な考方だけで過してゐて、何等その檀家に對する寺院としての勞作をなさないで良いものであらうかといふことを疑ふものでありまして、これらは宗政上

の根本問題でありますので、茲に言及することを避けたいと存じますが、再思反省して欲しい問題であると思ひます。御大坊なれば御大坊なだけに、いろんな機關も備はつてゐる筈でありますから、上述した諸點について、御實施を希ひたいものと衷心希望致します。

六、社會事業家の資格

凡ての事柄についても言へる事であるが、何かの仕事をするのにはそれに適應する資質の要素があるが、社會事業を行ふにも、やはりそれには無くてはならない要素がある。豐潤にこれを具へてゐる人はその資格を充分に有つてゐる事になるのですが、それを天性具有してゐない人でも、その人の己が缺點を知ることによつて、これを補ほうと努める事がその缺陷を償ふのであるから、その要望する、要素を知るといふことは大切な事柄である。子供嫌の人では兒童保護の仕事には不向であるし、算數や經濟上の事に興味のない人に、經濟保護の仕事は誂へ向だとは言ひ難い。然しこれらの缺點も、自らこれを認めてゐて、その缺を補はんとする努力が加へられるならば、自ら長じてゐると慢心して力めない人に比較しては寧ろ勝つてゐるといふべきであらう。而もこれら今例示した様な事柄は、むしろ枝末の事柄であつて、その根本は心構の問題であることを忘れてはならないのであります。

西洋では、古くから社會事業家の三要素として「三つのH」といふことが主張せられてゐます。その一はヘッド(頭)であります。その二はハート(情)で、次に大切なものはハンド(手)であるとされてゐます。共にその頭文字

がHであるから「三つのH」と謂はれるのですが、その第一の頭といふのは、明快なる理智の判断を意味して居ります。社會事業家は徒らに涙が多かつたり血の氣が豊であるばかりではいけない。其處には總ての事象に對して、常に冷徹なる理智判断を要するといふのであります。大坂に於て有名な話として残つてゐる事でありまして、藥屋の親爺さんが、方面委員の仕事をして居た。ある朝、年頃の婦人が店頭に立つて、店を開いて前の通りに打水をして、掃除をしてゐる小僧さんを捉へて押問答をしてゐます。その婦人は、猫入らずを買ひに來たのですが、印鑑を持つてゐないので小僧に斷られて「スゴ〜と歸つて行く處でした。店の主人はこれを見て、小僧に呼び歸させて、家に入れて座敷へとほし、澁茶をすゝめてから「鼠が騒ぎますか」と訊ねた。その婦人はおど〜してゐるが「はい、鼠が澤山居りました」と答へた。主人は重ねて「私は方面委員なので、決して御心配になることとはありませぬが、ほんとうにお宅には鼠がゐるでその驅除に、猫入らずが御入用なのですか。失禮ですが、お察しするところ、何か複雑な御事情がござりになるのではありませんか。決して祕密は他人には洩しませぬ。御差支なくば御話下さい。誓つてお力になります」と淳々と話しますと、終りには涙にくれて、事實を殘らず告白して、その不心得を白状してしまひ、その方面委員の力によつて圓滿なる解決を見た事件があります。小僧さんとの押問答を聞いただけで、どうしてそれが自殺をはかつてゐることを見破つたのか。藥屋の親爺さんはいふ。「それは多年の經驗ですが、早味猫入らずを求めのは必らずそれだと決めてよい。普通は鼠取りが必要な處置に窮して猫入らずと決めて、藥屋に來るのが朝のお客だ」と語りましたが、これは多年の經驗にもを言は

せた、その方面委員の理智の明快な判断だと言ふべきだと思ひます。川越市のある方面委員が、町を歩いてゐるとき、一町ばかり前方を、ある女が行く。それが常に生活扶助をうけてゐる孤獨の婦人の後姿に似てゐる。その婦人が風呂屋に這入つてゆくのに、不審を抱いて、跡をつけて番臺の女に訊いた。處がその女であり見違はなかつたので、「彼は何日目位に来るか、時刻は何時頃」と尋ねて見たが、生活扶助者には不似合で、回数が多く、時刻も閑人の入浴時であるので、さらに詳細を調査して見て、その扶助を直ちに差止めてしまつたといふのであります。調査の結果は、その婦人に後援者が出来たといふのであります。これらも方面委員の第六感の作りきまで、頭腦の判断が敏なることを物語つてゐるのであります。次に第二の情であります。これは内に燃ゆるが如き温かい情熱を有つことが大切なのであります。しかしこれは社會事業を行ふ様な人は、人一倍持ち合せてゐる心情でありまして、こゝに多くを申述べる必要はあるまいと思ひます。第三は手でありまして、これは手段の意味でありまして、頭で判断し、救恤の燃ゆる様な熱意があるにしても、如何にしてこれを救ふかといふ手段方法の立案が不可能であつては、何等の力をなすものではありません。應病與藥の妙味は實にこゝにあるのであります。

由來、宗教方面に關係ある社會事業家は、ある特別な人々を除いては、とかく事務的な方面のことを厭がられる風のあるものであります。これは精神方面、教化方面のことを強調せらるゝ結果かくなるのであります。少くとも社會事業の方面では、この缺陷を反省し是正する大なる努力が伴はねばいけないと存じます。左様な五月蠅いことは嫌ひだとか、そんな面倒なのなら止めたなど言はれて、投げやりにされる方を折々見受けるのであります。しかしこれでは第一、第二の資格は備はつても明らかに大なる錯誤を來すもので第三の資格を缺

るものと謂はなければなりません。私自らの經驗した處であります。府縣で方面委員の委嘱をせんとしたる場合、市町村長からの意見を徴して内申を取りますが、その際、學識人格ともに立派な方々を存じ上げてゐるので、僧侶の方々から選んで、當該市町村長にも私見を添へて内申させる様に力めます。その結果、委嘱を見た委員の中に多數の僧侶の方を見て心潜かに喜んで居りますと、處が改選期になつて見ると著しく僧侶方面委員の数を減じてゐる様なので、内情を調べて見ると、市町村長がこれらを除いた理由は、僧侶委員は活動してくれない、活動してくれても事務的な報告や調査をやつてくれないから、致方なく除いたのだとの理由があがつてくるのであります。これは左様な七六つかしい面倒な事は厭だといふので、當局の期待を裏切つた結果に外ならないのであります。私は誠にその度毎に残念なことだと、嗟嘆これを久しうするのであります。いかほどの名醫でも、自分が手にかけて病人ならば、如何にそれが親近の人であつても、例せば自らの家族であるにしても、その病状等を一々カルテに記載して、これが處置をも書き残すのであります。さうした事が基本となつて適應の處置が講ぜられるのであります。いかに煩瑣で好まないからと言つたとて、自らの調査したことや、處置したことは、これを一々記録して將來に備へるといふことを嫌忌してはならないのであります。かゝる事務的なことも社會事業の大切な仕事の一部であることを忘れず、所定の事項を取扱はなければならぬと存じます。皆さんは寺族婦人として、直接又は間接にかうした方面に、その缺を補ふの御覺悟を希ひます。

七、寺院厚生事業の特異性

従來の社會事業は、多くは困窮者薄倖者を對象とする事業であつたが、現代ではこれが厚生事業に脱皮展開するに至つた。少くとも厚生事業へ展開を示して來たことに就て、六ヶ敷い學理的な論究はこゝにその要はないにしても、これによつてその含蓄せる意義が、その及ぶ對象に見ても著しく廣汎になつて來たことは知つて置いて貰はなければならぬと思ふ。而も本講習會が、厚生事業の婦人指導者を目標とするものであるからは、寺院で實施する従來よりも意義の廣義な施設事業であることには間違はないのでありますから、已存の社會事業といふよりも、猶他方面に涉つた寺院中心の厚生文化の上に眼識を廣げ、深くその生活指導の部面までにも及んで研究して貰ふ必要があらうと存じます。

政府や府縣廳が官公の社會事業や、厚生部面に、相當の費用と人員とを配置して、現に諸般の活動を致して居りますが、かういふ時代にそれに比しては費用も少く規模も小さく、従つて従事員に於ても、不足勝ちな私の施設が必要かどうかといふことは、相當に問題になりうる價值があるとは思ひますが、如何に官公の施設が充實し遍滿して行つても、私設の社會事業や、厚生諸施設は、毫もその存在價值を減損するものではないのであります。官公及私設の社會事業施設は、共に存在して互ひに長短を補ひつゝ、進まなければならぬものであつて、その何れか一方に依つては、決して全きをうるものではないのであります。

私の施設であるものは、一町とか、一村とか、一府縣とかいふ様なものを對手にしてゐるのではなく、おなじ事情にある一小區域を單位としてゐるから、對手は勢ひ個人になる。従つて何をしてもしそれはよく行き届く。即ち家庭とか個人とかに即した取扱ができて、社會事件を個別化する便宜がある。だから、その施策の結果によつ

ては、漸次にその及ぶ手段の上に、變化を加へることさへ出来るのであります。處がこれが官公の事業では、機に應じ時に従つてその方法を變へてゆくといつた様な、行届いた手は打てないのであります。次に私的事業だと行届いた方法がとれるから、その對象に向つて血あり涙ある取扱ができて、倫理的な計らひが加へられるのであります。官公の施設では、どれほど心ではさう思つてゐても、その人その人について、個人的な異つた取扱はできかねるのであります。しかし、かく申せばとて官公の施設には、これらの短所を有つてゐるとはいふものゝ、個人的な私の施設に比べては、遙かに勝れたよい部面もあるのであります。彼に比してこれが劣つてゐるとは、一概に言ひ得ないのであります。例せば、私の施設は、いかにそれが立派な仕事であつても、何かの都合でいつ廢止されるかも判らぬが、官公の施設には、それがなくて、恒久性がある。私の施設よりも規模が大であることは争はれない事であるし、その及ぶ範圍も私の施設に比しては遙かに廣い。であるから、従つて効果も大きいと謂はねばならぬ。猶これは私的のものよりも基礎も確實であるといふこともあるし、又、官公の力でやつてゐるのであるから、人も設備も經驗もが勝れてゐるといふ諸點に長所を有つてゐる。かうした點をあけて見ると、いづれも一長一短があつて、容易にその何れに勝名乗をあけるといふ譯には參らない。勢ひ官公私の施設は、孰れも採長補短、相伴ふて進まねばいけないといふ結論が最も正しいのであります。

特に寺院に於て試みらるゝ厚生諸施設に於ては、これらの私設事業たる特徴を堅持する上に、さらに世俗の事業とは趣を異にしたる一部份を有つてゐるのであります。此點特に留意を要すると思ひます。即ちそれは飽くまでも信仰が中心であるといふことであります。それは判り切つた事だと言ふ人があるかとも思ひますが、實際

はよく判つてゐない向が多いのであります。中には自ら不必要な謙遜をされまして、寺院で施設せられて居りながら、それでは餘りに抹香臭ひからといつて、宗教的な行事を避けられたり、佛前での禮拜などにも遠慮されたり、訓話などの上に於ても、それをそれと露には言はずしてなどと、手加減して居られるのをよくお見受けするのであります。しかしこれは御一考を願はなければならぬ事と存じます。寺院中心の施設にして、これらを抜きにして何處にその生命があるのでありませうか。露骨に言へば反感を買ふからなどの手心は、極々僅少な特別の場合を除いては絶対に無用の事であると信じます。

十數年前の事と記憶してゐますが、一時宗教家のなす社會事業に就て、一部の専門社會事業界から物議を生じたことがあります。それは宗教社會事業に對する忌避の主張であつたのですが、それは間もなく解消したと記憶してゐます。その言ふ處は、宗教家のなせる社會事業は、専らその目的が信徒獲得の爲であり、宗教宣傳の具に斯業を須るもので、ただ怪しからぬといふのでありました。私共もその主張を聞いて、無理からぬ事と思ひ、共鳴を感じるものであります。神聖なる社會事業をけがして、これによつて宗教宣傳をなし、信者の増強にこれを利用することは、専ら社會事業に携つてゐる者の眼からしては、誠に迷惑至極であり、その對象者を愚弄するものであると言ふも敢て差支ないものと思ひます。かうした態度は、避くべく戒むべき行爲であると存じます。

寺院が社會事業厚生施設をなすのは、飽迄も信仰を中心とするものであるといふこと、前述の私の意見とは決して矛盾するものではありません。寺院の爲す處行ふ處は、どこ迄も信仰の餘瀝としての行爲であることを要します。従つて佛心を現代に具現し、此世に顯現する大悲行であるのでなければならぬと信じます。寺院の住職が、この社會公共の爲に盡すのは、大悲傳普化の大行であり、報佛恩の行業であるのであつて、世俗の所謂社會事業家とは、その志操の上に於て格段の相違がなくてはならないのであります。外儀の相は一般と何等の差異があるわけもありませぬが、その把持する信念の上に於ては、特別の矜持がなくてはならないのであります。信火が内に燃えて、外に形業に具現したるものが寺院中心の諸般の社會施設となるのであつて、世の所謂従事者とは、根本的に趣を異にしてゐる筈であります。ケチ臭ひ信徒護得などといふ巧利思想や、結果を求むる様な個我的妄想に由來するものとは、霄壤の差があるのであります。その事業は如何に渺たるものであつても、その内奥深く光彩を包める特色あるものたることを要するのであります。

八、寺院厚生施設の財源

現在の寺院の財政状態を見ますに、中には裕福なお寺もあるが、その多くは自らその實施する厚生施設の費用まで、負擔するに堪えるといふのは尠いと思はれます。本来寺院は營利的な考をもつてゐるものではなく、専ら法施をなす道場であるのであつて、檀信徒の財施に生きてゐる性質のものであります。尤も今日では、宗教家にして、蓄財方面に天才的と思はれる様な方も稀にはあり、相當の資産を有つてゐる方も皆無とは言ひかねますが、これは全く例外と申さねばなりません。自ら清貧に甘んじて生活する寺院に於て、餘計な社會的な活動などをしなくともよいといふ論者もあると思ふが、しかしそれには既に前述した様に、宗教的良心といふか、内に燃ゆる信火が外に發して行縁となるのであつて、やむにやまれぬ心持から昵としては居られないのである。換言す

れば世俗の人々には任せて置けないために起ち上るので、特に無限の慈悲心、涯しなき愛の權化として、宗教家が起つのでなければ出来ない仕事であるとして、驟然起ち上つたのが寺院社會事業、厚生の活動なのであるから、その財源に就ては、自ら他に方途を索めなくてはならないのであります。従つて、裕福寺院に於ては、吝みなく資財を投すべきことは論を俟ちませぬ。

その投すべき資財のない寺院と雖も、今日は決して拱手傍觀、五月坊主を決め込むべきではないのであります。その財源の捻出に到つては、今日お集りの有力檀信徒の方々からの絶大なる信施財施にこれを仰がねばならぬと存じます。然しこの財施たるや、飽迄も法施に酬ゆる行業であつて、報恩感謝の懇念から發するものであることを思ふとき、法施と財施とは、互に因となり果となつて現はれるものでありますから、寺院も寺院として、檀家も檀家として、正しくあらねばならぬことは言ふまでもありますまい。寺院としては衆生苦惱我苦惱の教訓をかしこみ、世に先んじて苦しみ、衆に遅れて樂む底の心持から、ひたむきに佛心の顯現に力め、これに對して師恩報謝の懇志を運んで、外護供養の財施をなすのでなければならぬのであります。道心に衣食あり、衣食に道心なしとの傳教大師の語は、特に意義深く感ぜられます。

寺院厚生施設は、飽迄も信仰の餘瀝であらねばなりません。これは已に述べたところでありますが、どこ迄も世の所謂事業屋に陥らないことが大切であります。従つて其處に、些の私心の介在潜入を容さないのであります。すべてが奉仕行であることを要します。故に經營の收支を明らかにして、一點の疑惑を有たしめてはならないのであります。これを公開し、汎く訴へて、その財源はこれを信施に俟つといふ態度に出づることは、少しも差支

のないことでもあります。菜根譚の所謂「鳥去つて潭、影を止めず。風過ぎて竹、聲を留めざる」底の心境が、極めて大切なること、存じます。

斯く申せばとて、寺院の住職が勝手に思ひ付いて、いろんな仕事を始め、これだけ經費が入用だから、これを檀信徒で負擔してくれ。それは自分の爲にしたのではないのだからこれを支出するのは當然だといった具合に、要求されたのでは、檀信徒と雖も困らるゝに違ひない。かうした場合には、豫め事業の性質なり、その構想なり、その實施方法なりに就て、よく協議し、大體所要經費の捻出方法に就て、見込をつけ熟議考究の上、着手すべきは勿論であります。

僅少なる經費であれば、檀信徒の割當支出もよいであらうし、さらに何かの法座の場合に、席上の懇志を受けるのもよいであらう。しかしそれは官廳方面とも、事前によく打合せ、公費補助の有無、その金額等も、大體の見當のつく様にしてかゝる慎重さが望ましいと思ひます。府縣費、又は社會事業協會、町村費區部落方面からの補助等をも見込をつけて進むべきであります。全額を檀信徒の懇志に俟つといふことなどは、可能ならば結構であるが、多くの場合、他に方途を講じてから、これを補ふ方法を取りたいものと思ひます。

なほ男女青年團體や、壯年、婦人等の後援團體を作り、共同耕作、勤勞作業等を計劃して、共同に勞役で奉仕させて、これによつて得る處を以て、その財源の一部に充當する様な方法は、是非とも計劃してゆきたいこと、思ひます。

かゝる際に收支の結末を最も明細に發表し、その参加者に周知せしむることを忘れて置きたい。これは従

來、寺院のこれらのあり勝ちの結果に鑑みて、特に深く希望する處であります。

九、官公私厚生事業との連絡

寺院厚生事業の特徴は、専らその精神方面にあり、教化に重點を置くところにあります。而して寺院以外の一般世俗の事業に於ては、この方面の努力が缺けて居り、また強調困難な事情にあるのであります。その事業が概括的であり、またその方途が經濟方面に主眼を置かるゝ結果、かうした事情にあり勝ちであるのであります。故に宗教的厚生活動は、常にこの缺けた方面に補遺増強の役割を果す要があると信じます。従つて常にこれと緊密なる連絡提携を保つてその本務を果さねばならないのであります。近い事例を擧ぐるならば、こゝに生活に困窮してゐる家庭がある。方面委員や、町村當局の骨折りで、これに對して救護法を適用して、生活扶助を開始して何程かの救護が行はれる。處が、これが行はれる様になつて、一家は前途に光明が見られ、見られないにしても立ち直る勇氣を出さなければ、お國にも村にも相濟まぬ譯であるが、不心得にもこれをよいことにして、浪費して一向に立ち直らうともせず、救護以前と異なることのない最底の生活を續けるといふ様なことは各所に見られる處である。かうした場合、何が缺けてゐるかといへば、精神指導、精神教化に缺陷があると謂はねばならぬ。しかしこれは大切な事とされてはゐるが、なか／＼一般に期待することは困難でもあり、無理でもある。これらは寺院宗教家の奮起によつて、市町村役場と連絡して、努力してゆかねばならぬ處であるのであり、こゝに活動分野がひらけてゐるのであります。

この家庭も、何處かの寺院の檀家なのであり、信徒であるのでありまして、前述せる御取持階層の中心を、一段下けて見直す必要を説いたのも、これらと連關のある事なのであります。貫子を虐待するとか、その實子でも虐らしく遇するといふやうな事も、普通は事實とも受取れない事であるが、東京市内あたりでは決して珍らしい事ではありませぬ。これらに親子關係をといてやるとか、その然るべからざる所以を教へるとかといふことは、兒童虐待防止法などの實施には缺くべからざる相伴ふべき教化であります。これらも宗教家ならでは出来ない處であります。司法保護にして見ても、釋放者の保護扶掖に努力して、再犯累犯の防護をするとか、世人の白眼視してゐる態度を改めさせ、専ら安住の處として、寺院に引取つて世話して更生させるといふ様なことも、ピクトルユーゴーの麗筆で描かれてゐるジャンベルジャンに對するミリエル僧正の態度なども想起されて、床しい宗教家の獨斷場である。

農村と醫療との關係を考へて見ても、明るい健康村を作るには、醫療の協同體制を作るやうなことは、健兵健民の要求されてゐる國策にも合致する極めて大切な事であるが、宗教家は國民健康保險組合の規程を率先研究して置いて、専らこれの障害となる村内富裕階層の教化に乗出し、これらの人々をして率先して協力を申出させてその設立の促進に當らしめる様にするとか、これら精神教化の受持つ面は、頗る廣汎多岐であると申すべきであります。

要は寺院住職——には限らない寺族全體がであります。一般の世俗の人々に先覺して、時代に先進して、推進力となり、現世的ないろいろな方面に、深く佛心の顯現に努力し、一郷の敬仰を受くる結果ともなれば、その活

動に對して、官公私の連絡も自ら圓滑に進展してゆくものであると信じます。

しかしそれには時代に先覺するだけの不斷の熱意が根本原因となつて開けてゆくのであることを忘れてはなりません。故にこれには人知れぬ攻究と研鑽を積み、終始その筋との連絡を保持するの用意が大切であります。現に公布され實施されてゐる社會立法は、相當の數に上つて居りますが、それらの必要な連絡を要するもの、内容を、一應は心得て置く必要があります。私はその點、宗教家は恰かも藥劑師のやうなものだと思ひます。藥劑師の處へは、あらゆる病氣についての藥を求めに参りますが、宗教家はその村、その町、その市等、その郷土に於ける藥劑師的な悩みの引受所であると思ひます。嘗て富山縣に在任したころ、東本願寺の富山別院の石川輪番の相談をうけて、別院の前にこんな札をかけられる様にしたことがあります。

「思案にあまり、身の振方にお困りの方はおるで下さい。何でも祕密に御相談に應じます」

と。かくしていろんな處置に困り身の振方に困つた人々は寺門に集るのであります。尤もこれは都會地の話で、農村であれば、さらに理想的で、向ふから相談に來なくとも、村の誰彼の家で、どんな問題が起きてゐるかは訴へらるゝまでもなく存してゐるのですから、こちらから不請之友となつて、進んで積極的に相談に乗つてゆかねばならぬのであります。その場合、人事百般の事象——生活相談、人事相談、教育相談、職業相談、金融相談、衛生相談、法律相談等々あらゆる面に於て、何等かの適切なる指示を與へうるものでなければなりません。これには辯護士でなくても法律に明るい人とも連絡の出来るやうして置かねばならぬし、醫師とも官廳とも連絡がなければなりません。その多くは社會立法で片のつくものが多くのでありまして、諸般の社會立法については一

通りの心得がなければなりません。恰度、藥劑師がその病氣に應じて暗がりのうちでも、藥の置場を薬局で承知してゐるやうに、苟くも厚生的諸施設をやつてゐるものとしては、これらの心得がなければならぬと思ひます。その意味に於て、官公私厚生事業方面とは緊密なる連繫を保ち、その法規の大體は、不斷に留意して判るやうにして置くだけの心遣が必要であります。己を知り彼を知るのが相互の密接なる提携連絡のできる源なのであります。

十、寺院厚生施設の種々相

寺院に於ては如何なる厚生施設を實施すべきかといふことには、一定不變の定則があるわけではなくて、その土地その土地の實狀に適した、必然的に要求されてゐる事柄を取上げてゆけばよいのであることは已にこれを述べたとほりであります。特に單に貧困者の救濟といつた部面——所謂社會事業の範圍にのみ局らず、猶廣くその生活指導にまで廣義に展開し、厚生事業といふ語に表はさるゝ迄に進んで來た現在に於ては、消極面から積極面に單に補充的なものばかりでなく建設的な面にまで推し進められて、幾多の部面に手を伸ばして實施して見るべきだと思ひます。従つてどんな施設がよいのであるかと謂つた處で、なか／＼一概しかねる處であり、短時間にその一々の仕事を擧ぐることは最も困難なことでありますが、これは皆さまの御考に任して置くより外はないとして、こゝには私の思ひつきの儘を二三例示して置かうと存じます。

在來、多く見られた常設若くは季節的な託兒所や幼稚園、これは誠によい施設でありまして、今後益々一般化

して普及させることを希望したいと思ひます。この外に稀にはありますが、寺院で立派な授産事業をおやりになつてゐる處があります。栃木縣那須郡烏山町大谷派の慈願寺那須信受君などがそれでありませんが、誠に敬服して居ります。これはよほど六ヶ敷いのでありまして、かゝる困難な事業を立派に經營してゆくのには、餘程各種の方面との密接な連繋があり、眞剣に精魂を打込んでやらねばならぬのですが、そのほかにも御一派内でもあると思ひますが、並々ならぬ御苦心があること、存じます。日曜學校や男女青年指導なども、誠に應はしい仕事でありまして、本來の精神教化の問題として、愈々重要性を増大しつゝある現在、特に御健闘を祈りたいと存じます。

最近、至る處に、軍需工場その他産業労働の人手が不足してゐるので、農村の子女も、随分これらの方面に傭役されて居りますが、工場から遠隔の地を自轉車などで通勤してゐる者が澤山に居ります。相當これには無理と思はれる様な向もありますが、これを目撃された寺院の坊守が、寺を開放して彼等の爲に宿舍として提供されてゐるのがあります。明暮は佛前で勤行をして、宗教的な徳操を涵養し、家からの通勤の事を思へば非常に近くもあるし、親達も極めて安心であるといつた一石二鳥の施設であるが、戦時下に於て寺院で實施する適切恰好の施設であると申すことができませう。今日は政府に於ても總ての建築物を産業労働者の宿舍難を緩和する上に役立てやうと、血眼になつてゐる際、宿舍を提供した上に、産業労働青少年の不良化防止対策の上にも寄與する處甚だ多いと思はれます。

何處の土地でもといふ譯には参りませぬが、事情によつては、一郷一村の人々が警防團や消防隊を組織するやうに、寺院を中心として、その各種各様の業態を有つてゐる檀信徒に依つて、同信報國の觀念から、共助會の如き團體を結成して、同信同友の間に於ける不慮の災害等による困難を救助する組織を作ればどうかとも考へられます。例へば、秋の突風に依つて、町離れの堀立小屋に住んでゐた篤信な婆さんの獨居房が吹き飛ばされたといふ様な場合、共助團の發動によつて、持ち合はせの材料と、自らの持つ力量の發揮によつて、美はしい共同奉仕が現はれて、直ちに以前にも増した小屋が完成するといつた様な、微笑ましい喜びが望まれるといふ様なことは、信仰に依る和やかな美はしい情景だと思はれます。物資の入手難の叫ばれる折柄、又た人手不足の現在、かゝる試みが有つ特異的な事業ではありますまいか。これは町とか都市に近い郊外地あたりに試みらるべき寺院施設の一例ともなるであらうと思ひます。

さらに、相當の設備と人的要素の整つた、一組内とか、一縣、一郡といった様な佛教聯合會や、青年僧侶の申合に成る文化的統合運動として適當ではなからうかと思ふのは、寺院相互のブロックを結成して、青年男女又は壯年團あたりの人々を對象としての「寺院めぐり」の健歩運動に、宗教教化を織り込んだ時代的な一施設である。それは一日の行程、十里内外の距離の寺院が選ばれて宿舍を提供する。その寺院では附近の名所舊蹟や宗教的偉人の行蹟を調べ、傳説事蹟等教材となる様な點を豫め調査して置いて、甲乙丙丁の寺を巡れば、四五十里の三日間四日間の行歩ができる様にして置く。宿所では住職が宗教的行事は勿論、その土地の青年子女も集めて來泊したものと懇談の機會も作る。そして専ら郷土誌による説話を試みる。かくして一夜は楽しい歡談と修養との團樂を行ふて翌朝次の行程に移る。これを二日間、三日間の行程として實施する。一寺には二三十人の宿泊の用意をして置くのであるが、借りて間に合はせる場合もよいし、夜具の必要のない夏季に限つて實施してもよい。炊事

も一汁一菜主義にして、婦人會等の斡旋配慮に俟つてもよからう。一泊二十錢位は徴しても差支なからう。かくすることによつて、青年はその期間、他の土地の青年との交歓もでき、郷土の生きた歴史事績の懐古ともなつて、愛郷の念を振起するに役立たう。これが都市集注の傾向を是正するにもよからうし、健康増進ともなり、農村特有の誇をも感得するであらう。寺院住職は、これら對象の精神を把握して、宗教的教養を與へる尊い機會を得るであらうとも思ひます。これは獨乙のワンダーフォーゲルの運動を日本化したものとも謂へやうが、古くは西國巡禮などの習慣を現代に生かした行き方でもあると謂へませう。

とにかく、これらは私の今この席に於て思ひ出した事柄を、順序もなく羅列したに過ぎませんが、いろいろ考へて見れば、思ひ當ることもあると存じます。要はその精神です。この間も私の親戚の寺に参りました際、恰度植付の時期でありましたが、寺の前に風呂桶が幾つもならんでゐて箕の子張りの圍がしてあります。何に用ゐるのかを聞くと、村の人が忙しい農事に従つてゐるのに、何も私は御役に立たないから、せめてお風呂を立て、あけやうと思つて、かうして毎日お湯を涌かしてゐるのだとの事で、私は深く心をうたれのです。別に社會事業とか厚生事業といふ事を理論立つて心得てゐる人ではないが、食糧増産にいそしんでゐる村人に、奉仕せねば濟まぬと思ふ心から、遂にこんな立派な寺院施設を考へたのだと思つて、私は頭がさがつたのであります。

共同炊事の事にしても、出来ない六ヶ敷い事だと考へないで、なんとか出来る範圍にその方法を案出して、増産奨励の國策に貢献したいものだと思ひます。猶申述べたい事柄が澤山ありますが、時間の都合上以上で一應私のお話を終る事と致します。御清聴を感謝致します。

昭和十八年 二月十日 印刷
昭和十八年 二月十五日 發行

非 賣 品

編輯者

京都市下京區常盤町
眞宗大谷派宗務所内教化研究院
岩 見 護

發行者

京都市下京區常盤町
眞宗大谷派宗務所内大谷出版協會
清 水 洪

印刷者

(西京七) 代表者 須 磨 勘 兵 衛
京都市下京區西洞院七條南入
内外出版印刷株式會社

發行所

京都市下京區常盤町
眞宗大谷派宗務所内
大谷出版協會



